

浪江町復興計画策定委員会(第2回まちづくり検討部会)議事概要

1. 日 時 平成25年7月23日(火) 13:00~16:00

2. 場 所 二本松市市民交流センター 1F 多目的室

3. 出席者

まちづくり計画検討委員	38名(A:12名、B:14名、C:12名)
ファシリテーター	3名
有識者・オブザーバー	5名
事務局	7名

4. 議 事

- (1) 開会
- (2) 部会長あいさつ
- (3) ファシリテーター紹介・前回の振り返り
- (4) 事務局説明 【資料2】
- (5) グループ討議 テーマ:復興まちづくりの検討過程を考える
- (6) その他
- (7) 閉会

5. 議事概要

○部会長あいさつ

なみえ絆いわき会 大波大久部会長

- ・お忙しい中第2回部会に参加して頂き、ありがとうございます。
- ・短い時間ではあるが、3つのテーブルごとにそれぞれ意見を出し合って、これからの浪江町のまちづくりということで、形あるものとして町民の皆さんに出していきたいと思っているので、前に進む、プラス思考の話し合いをして頂きたい。
- ・4日くらい前に浪江町に入り、小高区行津の6号線のところを通ると、町民の方々が自ら草を刈っている光景を目にした。このように町民が汗を流すということからの復興の形もあるのではないかと思った。
- ・また、モデル事業ということで、南相馬小高の6号線のそばに太陽ソーラーが設置されているが、このように形に見えるもので、浪江町も復興に向けて進んでいるということを町民の皆さんに示していけたらと思う。
- ・全てのエリアは難しいが、避難指示解除準備区域等、線量の低いところについては進めることは可能だと思うので、皆で熱く語って頂きながら、意見交換会を進めて頂きたいと思う。

○ファシリテーター紹介・前回の振り返り

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・昨年度は有識者という立場であったが、今回はファシリテーターとして進行役をさせて頂く。

- ・私以外に二人、ファシリテーターがいるので、紹介させて頂きたい。

地域社会デザイン・ラボ 遠藤智栄ファシリテーター

- ・普段はまちづくりに係る仕事をしている。
- ・今日はBグループの担当させて頂くが、浪江の皆さんの話し合いが一步でも二歩でも前に進むようなお手伝いできればと思っている。今後ともよろしくお願いします。

コミュニティ・ワークス 青木ユカリファシリテーター

- ・前回の部会もお邪魔させて頂いた。
- ・今日はCグループを担当させて頂く。
- ・これからのいろんな検討のレベルでお手伝いをさせて頂ければと思っているので、よろしくお願いします。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・遠藤さんと青木さんは震災前、町民の皆さんの勉強会にお招き頂いたことがあるが、今回また改めてお世話になる。
- ・私達3人、特に私と遠藤さんは、県外に避難している皆さんの支援活動に取り組んでいる。
- ・広報なみえのこころ通信の記事については、震災の年の7月1日から今までで200件を超える取材を続けており、皆さんのお手元にも届いていると思う。
- ・その他、「しゃべり場」という県外に避難している町民の皆さんの交流の場を設けたり、町民の皆さんの絆づくりに取り組んでいる復興支援員のサポートをさせて頂いている。
- ・浪江町の中というよりは、町の外、県外に避難している人とのつながりが強いかもしれないが、そのような情報も含めて、皆さんと議論していきたい。
- ・第1回部会の全体の印象としては、今回私達がどのような作業をするのか、検討部会というのは何をするのか、ということに対して、私自身も含め、共通認識が持てていなかったかなと実感した。
- ・検討部会で何を検討していくのか、どのような作業をしていくのか、事前に郵送した資料に基づいて説明させて頂き、皆で共有していきたい。

〈事務局説明〉

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・昨年度議論した復興ビジョンや復興計画の内容について、形になっているのだろうか？と私自身も疑問を持っていたが、これらが進んでいるのか進んでいないのかについては、今年度、別の部会である進行管理部会で検討している。
- ・それとは別に、復興計画の時点において、具体的に中身まで踏み込んでいなかった項目がいくつかある。
- ・その中のひとつ、平成29年3月までに皆さんが戻ってくる時までに浪江町をどのような町として整備していくのかということ、具体的にどのようなまちをつくるのかということについて議論していく場が、今回のまちづくり検討部会であると認識している。
- ・よって、復興計画の第二次計画ではなく、第一次計画の具体的な中身について議論していくことを確認して頂きたい。
- ・話し合いの進め方については、資料の通り、目指すべきまちの姿を共有し、町全体の土地利用、復興拠点と、段階ごとに検討を進めていく。

- ・今回は世代別にテーブルを分けているが、世代によっても目指すべきまちの姿は違うということ、また、話し合いについては、段階ごとに進めていくということをご理解頂きたい。

○質疑応答①

委員

- ・毎回参加しているが、自分のモチベーションが何なのか、モチベーションが消化できない状態で進んでいる。
- ・浪江町のシステム自体がおかしいのではないかと思います。
- ・皆が自分の言いたいことを全て出し切って、委員会としての意見としてまとめ、それを町に出していくという形がシンプルでわかりやすいと思う。
- ・ファシリテーターをどのように選んだのかを知りたい。ファシリテーターとの信頼関係がないと、良い結論には持っていけないと思う。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・ご指摘されたことが今回の部会でやりたいことだと認識している。
- ・前回の復興計画策定委員会においても、町民同士が意見をぶつける必要がある、具体的に進める提案を出すべきであるという意見があった。
- ・よって、意見をぶつける場面をつくっていくことが私達の役割であり、今回の場の設定の意味合いではないかと考えている。

事務局（復興推進課 近野副主査）

- ・櫻井先生の言われる通り、徹底的に話し合うことをやりたいと考えている。
- ・最終的には計画書としてまとめることを目標とはしているが、皆さんの話し合いがあってできていくものだと考えているので、徹底的に議論して頂きたい。
- ・徹底的に議論をして頂くために、第3者であるファシリテーターに入って頂き、話し合いを円滑に進めていきたいと考えている。
- ・櫻井先生を選んだ理由は、こころ通信やしやべり場等、県外避難者の方との交流が深く、また、震災後、このような町民の皆さんと話し合う場を町と櫻井先生とで一緒につくってきたという経緯があることから、櫻井先生が相応しいと考え、選定した。

委員

- ・来年2月までの8～10回程度の部会の中で、意見をまとめ、図面や模型等、町の人達に見てもらい、わかるものをつくるというのは、経験上かなり困難だと思う。
- ・徹底的に議論するということは大切ではあるが、最終的には成果品をつくるということを考えると、具体的な提示、内容の議論が必要である。
- ・例えば、町中に遺跡があるが、文化的に町の歴史上大事な遺跡は残そうとか、そこに施設を持ってこようとか、具体的な内容を提示し、話し合いだけで終わらないようにしたい。

事務局（復興推進課 近野副主査）

- ・できるだけ8回の部会でつくりあげていきたいと考えているが、場合によっては回数を増やし、徹底的に議論した上でまとめていきたい。
- ・ただし、話し合うだけでは何も決まらないので、話し合う場面と決めていく場面を使い分けながら、また、回数を増やすことも含め、事務局としてできるだけ対応していきたいと考えている。

○グループ討議

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・今日はこれから進めていく作業に対して、皆さんがどんな思いを持っているか、自由に出し合いたい。
- ・ただし、大きく段階ごとの論点として、検討を進めて行く上で「気になっていること（わからないこと）」、もう少し踏み込んで考えている方々は、これからまちづくり整備計画を議論していく上で「議論する必要があること」、もっと踏み込んでいる方は、こんな町にすべきだという「具体的な提案」があるかと考えている。この3つの段階を踏まえて進めたいと思う。
- ・ただ、ひとりひとりまちを見る目線が違うので、3つのうちどれが正しいということではなく、大きく3つくらいの段階があるということである。
- ・どこに合わせるではなく、自分自身がこれから作業を進めていく上で考えていることを出し合いたい。
- ・今日の目標は、どのような議論をしていくべきなのかを共有する、皆で足並みを揃えることとした。
- ・今回は、正副部会長より、世代別でグループ分けをしたら良いのではという提案に基づき、このようなグループ分けとした。違うグループ分けの方が良ければ、グループを変えることも可能であり、今後も、正副部会長等、皆さんの意見を基にして進めていきたいと考えている。

【Aグループ】

コミュニティ・ワークス 青木ユカリファシリテーター

- ・今日は先程お話があった通り、「気になっていること（わからないこと）」、「議論する必要があること」、「具体的な提案」で皆さんに意見を出して頂くお時間だと考えている。
- ・3時からそれぞれのグループで確認し合うので、どのような議論になったか等、どなたかお一人、発表して頂きたいと考えているので、それまでの時間、2つのグループに分かれて意見を出し合って頂きたい。

〈A-1班〉

委員

- ・気になっていることとして、除染の進捗状況はどうなっているのか。
- ・市街地が一体的に整備されないで一部だけ整備されることが心配である。
- ・まちを集約、集中化して整備することを議論したい。
- ・放射性物質の拡散防止対策が必要ではないのか。

委員

- ・まちづくりには関係ないが、提案として企業誘致が必要ではないのか。
- ・まちづくりに必要な財源の確保が必要。浪江町には税収がないので財源をどうするのかを考えるべきではないのか。
- ・高齢者だけが町に帰還し、町役場として運営して行けるか。問題ないのか。
- ・町に帰還後の賠償はどうなるのか。賠償が終了し、帰還後の職場が無ければ生活できない。
- ・世代により、町への帰還意志が違うのではないのか。町には戻らないという選択もあるのではないのか。
- ・まちづくりを誰が進めて行くのか。（まちづくりの担い手）

- ・町として、一次産業の再開、雇用の確保が重要である。
- ・南相馬市に公営住宅が出来ることが帰宅困難地域が解除された場合、帰宅困難地域の入居者はどうなるのか。
- ・今の時点で目標設定をするのではなく、除染、原発事故の収束を見定めてから設定年次を定めた方がいいのではないのか。
- ・帰還困難区域が解除された後、震災前の企業が事業再開する企業数はどれだけあるのか。また、新規の企業誘致はどうするのか。
- ・解除後の帰還人口を想定したまちづくりが必要ではないのか。
- ・帰還時期の目標を設定した場合、インフラ整備の完了時期はいつに設定するのか。

委員

- ・除染作業の進捗状況についての議論をすると進まないのだから今回は除染については議論しない。
- ・5年後の帰還時に、避難前の住宅に本当に住めるのか。修理をするだけでは住めないのではないのか。
- ・人口規模を何人に想定したまちづくりをするか。また、5年後の帰還時に高齢者だけが先行して帰還した場合に生活出来るのか心配である。
- ・中間貯蔵施設の完成の時期はいつになるのか。
- ・前提となるまちづくりの条件をある程度決めないと議論が進まないのではないのか。

委員

- ・墓地予定地の文化財の調査はどうなるのか。墓地建設に文化財は影響しないのか。
- ・漁業関係者であるので一次産業の再開が重要である。
- ・災害復旧の関連で請戸漁港を復旧する方向で進めている。
- ・水産物の安全性の情報発信をどうすればいいのか。原発から海へ汚染水が流出している厳しい状況である。
- ・インフラ整備についてはどうなるのか。
- ・雇用の確保の為、企業誘致を進める必要がある。
- ・津波災害の土地利用について議論が必要であると考えている。
- ・漁業の再開については漁業権があり、海のどこでも漁業ができるわけではない。

委員

- ・個人的な意見ではあるが、町民の帰還を前提としない町の再生を考えるべきではないのか。町民は帰還しないことを前提に議論したい。
- ・財物補償では生活再建できない。帰還する、帰還しない場合のどちらでも選択できるようにして、帰還しない場合の財物補償とは別に浪江町の土地活用を考えた生活再建を支援するシステムが必要である。
- ・ゼロベースでの土地利用を考えている。具体的には権現堂地区を更地にする前提での土地活用である。家屋の大規模半壊、全壊が多数ある地区であり、除染作業を考えれば更地にして除染したほうが効率的である。大規模半壊は除染の対象ではないと聞いている。ガレキの撤去等が無い部分から除染作業に着手し、ガレキ等がある箇所についてはガレキ撤去後の除染着手になる。
- ・新しいまちづくり整備と除染することを考えると、効果的な方法として更地にするべきである。区画整理事業、土地収用事業などの手法を活用し基盤整備をする。住民自身が帰還する、帰還しないことを選択出来るようにする。

- ・廃炉の為の前線基地として、低線量の6号線東側について廃炉関係企業を誘致する為の土地利用を考えてはどうか。廃炉関連の技術を浪江町の基軸産業として育てたい。
- ・浪江町のまちづくりは歴史的に江戸時代、明治時代、今回、3回目と認識している。50年後、100年後を考えてまちづくり計画を策定するべきではないか。
- ・6号線を中心として東西各1Km圏でのまちづくりを考えて、都市計画、インフラ計画を決め整備を進めることを考えている。
- ・除染とガレキ撤去は同時に対応しない。ガレキ撤去は復興庁の管轄で除染は環境省の管轄であるが、除染とガレキ撤去は同時に対応してほしい。
- ・権現堂地区ではどれぐらいの家屋が使えるのか。家屋の内部調査の実施が必要ではないか。環境省は権現堂地区の建物調査を実施している。
- ・町民以外（廃炉関連企業の作業従事者）の住むまちづくりも考えられるのではないのか。
- ・まちづくり計画の想定時期をもっと長期的な計画で考えるべきだ。
- ・町内に帰還したい町民の為に既存家屋及び新設の住宅整備が必要ではないのか。
- ・町外コミュニティは仮設住宅の次の一時的なものなので、まちづくり計画には考慮する必要はないと考えている。
- ・若者の雇用を確保する為、企業誘致を進める必要がある。
- ・小学校、中学校の子供がいる家庭はすぐには帰還しないと思う。

〈A－2班〉

元青年会議所 戸川聡副部長

- ・気になっていることとして、まちをつくる中での近隣町村との協同。また、まちづくりを新たにしていく中での町のテーマをどうするか。
- ・議論する必要があることとして、まちづくりの順番をどうするのか。現状のまちを修繕して再生するのか？新しい町をつくるのか？
- ・まちづくりの意見を実施するのに、国や県に対してどうやって進めていくのか？
- ・具体的な内容としては、どのような町にするかということで、当初の住居者は帰還希望者、及び原発復旧、ふるさと復旧関係者。よって、5,000人規模の新しいまちをつくる。
- ・まちのテーマとしては、復興、復旧最前線のまち。
- ・現在のまちの様に新しいコンパクトシティを作り、現状の町を整備していくのが良いと思う。コンパクトシティを作ることで、当分の間、水はタンク供給等で対応をする。

委員

- ・具体的な提案として、家族と一緒に住めるまちづくり。誰もが住みたく魅力的なまちづくり。幼、小、中、高、一貫教育により日本一東京大学に入学できる町を目指す。そうすることにより、子育て世代等も戻ってくる可能性もあるのではないのか。
- ・議論する必要があることとして、皆が戻ってきたくするようにどのようなまちづくりを進めていったらよいのか。また、まちづくりを進めていく上で何が弊害になるのか、それをどのように解決していくのか。
- ・気になっていることとして、雇用をする企業を誘致するには何が必要か？戻ってくるには、働く場が必要。また、福島第一原発の今後の状況。

委員

- ・町民が帰還したいと思うような町にする。

- ・スラブチッチに学ぶ。前例を真似していくようなまちづくりも考えられるのではないかな。
- ・放射線の安全基準を IAEA の世界基準にもどす。
- ・実現できる事はグループを作り実行する。瓦礫の片づけ等、専門的にできるグループもあるので、そういうものを活用して前に進んでいく。

委員

- ・気になる点として、放射線の低線量被ばくの影響についての明確化。戻る人、戻らない人の違い。
- ・議論する必要のあることとして、土地利用を所有者の自由でいいのか？就労、健康、インフラなど、若い人が戻れるための納得できる環境について。
- ・具体的な提案として、浪江町を現況で利用できる施設の誘致。

委員

- ・気になる点として、放射能で死んだ人はいないのに、皆逃げているのは何故？
- ・1 msv、5 msv、20msv、50msv の医学的、物理的な裏付けはあるのか。しっかり研究をやらないと皆戻ってこないし、人が帰ってこないともちづくりをしても仕方がないのではないかな。
- ・自宅帰還、町内コミュニティ、町外コミュニティ、県内避難、県外避難の5通りの人を同等に扱うことができるのか。それを考えたまちづくりは可能なのかな。

委員

- ・気になる点として、浪江町単独で動けない、動きづらいものがあるのではないかな。他市町村との協力体制が必要。
- ・各地区、各行政の動きがわからない。発信されている情報をもっと明確に入手する方法はないのか。
- ・浪江町の復興の動き方、進み方がわからない。
- ・具体的な提案として、津波から逃げることを考えていくような、安心につながる防災・避難の考え方があって、その上でまちづくりを考えていく。
- ・始めに動き出せるもの、優先順位を考えていく。
- ・どういった年代をターゲットにしていくかということがまちづくりに必要であり、町に戻る人口よりも年齢なのではないかな。
- ・人間のことばかりではなく、環境、自然界のことも考えていく必要があるのではないかな。
- ・気になっていることとして、事業計画と費用の折り合いがどうなっているのか。
- ・今後、事業を動かしていくためには、浪江の動きだけでなく、国の考え方、国へのアプローチの仕方も考えていかないといけないのではないかな。

委員

- ・震災前の浪江町に帰りたい。線量やインフラの問題などを考えた場合、実現性はあるのかな。
- ・まちづくり案が要望になっているのかな。

委員

- ・部会以外の町民の人達の考えはどうなっているのかな。

委員

- ・年齢によってもかなり違うのではないかな。
- ・産業は誘致できるのかな。

委員

- ・企業が戻らないと、ただ住むだけというのでは成り立たない。

委員

- ・全てを戻すのは無理でも、廃炉関係の作業員がいる。
- ・2、3年後使える場所をうまく使っていく。

元青年会議所 戸川聡副部長

- ・企業を戻すなら、法人税を減額する等、国で特例をつくらないと難しいのではないかな。
- ・やれるところからやる、特に産業再生が大事。人口が戻ってくるのはそこからだと思う。
- ・浪江町内の除染等の作業員は別の町から通っている。浪江町から通えるようにしたい。

委員

- ・低線量のエリアだけでなく、高線量だからこそという企業もあるのではないかな。

委員

- ・同じように原子力災害等を受けた町のまちづくりの例や研究の成果等、成功しているところを取り入れる等、参考にしていくのが良いと思う。

【Bグループ】

〈B－1班〉

委員

- ・議論すべき内容としては、本宮市で浪江町民のサポートセンターを運営しているが、町民のニーズは刻々と変わっている。このため、10年先を議論しても意味がないと思う。今何ができるかが大事であり、そのことについて皆さんに考えて欲しい。
- ・具体的な提案としては、県のモニタリングの結果が出て、浪江町の卵が全国どこへでも出荷できるようになった。また、野菜を作る準備をしている。
- ・浪江町で住む地域ではないところで仕事をする際にトイレが必要であるため、下水道が整備されるまで1次的に自分で浄化槽を設置したいが、それが可能になる方法があるといいと思っている。

委員

- ・10年から20年先の話より、常磐道から東の低線量地域をいかに活用するか計画を考えるべきであると思っている。
- ・除染するのであれば、建物をすべて壊して新たに町をつくる計画が必要であると思っている。
- ・農業を再生するには水の確保等が難しいと思う。農地を太陽光発電用地に利用する話もあるのでそういった計画についても議論すべきであると思う。
- ・介護施設やスーパーなどは、当面、南相馬市にたよるしかないのではないかなと思う。
- ・平成29年3月に浪江に帰るのであれば、住宅の整備もどんどん進めるべきだと思う。

委員

- ・浄化槽については、役場、警察署等の100人分のトイレ使用を見込んで、貴布祢に準備しており、9月からトイレが使えるようになる。
- ・一般の住民も整備費用を自己負担すれば自分の敷地内に浄化槽を整備することは可能であるが、浄化槽の大きさについては、建築基準法で決められている。また、設置する際は水道があることが前提となる。相談には応じられる。
- ・資料の中で最初に人口規模の話が出てくるが、町に帰れる条件整備がなされて初めて人口規模の話ができると思う。最初に人口規模の話をする考え方はおかしいと思う。

- ・上下水道の復旧は、低線量地域は下水道区域のため、下水道の復旧を行わないと上水道も使えない。このため、下水道の復旧に合わせて上水道の復旧を行うことになり、産廃や除染の問題がない前提であれば、2年で復旧する目標である。
- ・低線量地域以外も防火等の観点から上水道の復旧を並行して進める予定。
- ・仮設トイレの汲み取りは、今までの富岡の処理施設が使えない状態なので、処理施設が決まっていない状態である。

委員

- ・北幾世橋行政区の役員会の際に、草刈りの話が出たが、草刈機や保険の問題があり、やりたい人だけやればいいということになった。
- ・10年後の話をして意味がない。5年以内に何をすることが大事である。大事なのは除染と瓦礫処理が終わってからの計画であるということ。役場としては、現実に合わせて計画を立てるのか、北朝鮮やソビエト連邦のようなスローガンだけ掲げるのか。
- ・除染をするには瓦礫処理が先に必要だと思うが、進んでいない。

委員

- ・前回のふるさと再生部会でも最初に除染の話が出て、議論が前に進まなくなった経緯がある。

委員

- ・河川敷はどんどん線量が上がっている状況がある。河川の上流から流れてくる放射性物質の対策を考えている人がいないのは問題。これを何とかしないと今回の議論は無理ではないか。
- ・学識の先生方も現場をもっと見ないと実態がわからないと思う。
- ・高齢者は放射線が高くても帰りたい人がいるので、そこで死にたい人たちの町にするという話が区長会でも出ている。水道・道路等のインフラを直して高齢者のシニア住宅等をつくるべきだと思う。病院は引退した先生を連れてくればよい。
- ・買い物は、震災前からシャッター通りであったことを踏まえと、ベニマルのところに仮設店舗を作って、大きな買い物はバスで行けばよいのではないかなと思う。
- ・子どもたちは30年は帰れないと思うので、30年後のことは若い人たちが考えればいいと思う。

委員

- ・低線量地域の家が壊れている所は更地等にして新しい町をつくれればいいと思う。自分は大堀に住んでいたんで、当面帰れないが、将来子供たちが気軽に帰ることができるような浪江町を造っていくべきだと思う。
- ・我々が、地道に時間をかけて段階を踏んで取り組んでいくしかないと思う。とりあえず、高齢者で帰りたい人が帰れる所をつくる等の段階を踏まないに進めないと思う。

委員

- ・自分は幾世橋という所だが、住民の3割しか帰らない場合に町が虫食い状になるため、一か所に集まらなければならないのではと考えている。
- ・浪江の場合は駅前が中心ではなく、幹線道路である6号線を中心に考えるべき。

委員

- ・ビジョンにしても、復興計画にしてもある程度時間を決めたが、それにとらわれすぎて見失うこともあると思う。時間軸に縛られない発想も必要なのではないかなと思う。
- ・20～30年後のために今、足がかりを作っていく幅広いまちづくりの発想が必要であると思う。
- ・土地・人口などベースとなる数字はオープンにして欲しい。それによっても計画が変わる。
- ・必要な作業と優先順位を見直す必要がある。

- ・誰が戻りたいといっているかもはっきりわからないのではまずい。

事務局（復興推進課 金山係長）

- ・今の段階では1月にアンケート（無記名）を行ったときの戻らない人と決めかねている人の数字はわかる。

委員

- ・発電所の状況が1月と今では違うし、特に仮設住宅のお年寄りの方々の気持ちが動いている状況がある。
- ・どれだけの人が帰るのがかわからないとインフラ整備の大きさも決められないと思う。

事務局（復興推進課 金山係長）

- ・一通り皆さんの意見を聞いたが、皆さんの意見を聞いて新たに考えたことがある方は発言をお願いしたい。

委員

- ・とにかく、瓦礫処理と除染ありきでその後のことだと思う。

事務局（復興推進課 金山係長）

- ・実際には、瓦礫処理と除染をクリアしないと次の段階には進めないが、次の段階はおそらく遅れることはあってもやることは同じだと思うので、それがクリアされる前提で議論することは必要だと思う。

委員

- ・例えば、避難指示解除準備区域の中で、非常に線量が低いところでも除染は必要なのか。

事務局（復興推進課 金山係長）

- ・今のところそのような所も除染をやることになっているようである。

委員

- ・自分で除染を行ってはだめなのか。

委員

- ・国がやると決めてしまったのでだめだと思う。国が動かない限りだめ。じゃあ国を動かすのは誰なのかという話になる。
- ・具体的には東中のあたりに年寄りためのシニア住宅、家を無くした人のための復興住宅と介護施設と診療所と買い物バスがあれば住めると思う。
- ・帰りたいかを聞くときに「仕事があれば帰りたいか」を聞くのはナンセンスだと思う。仕事があろうが無かろうが帰りたいか帰りたくないかの二者択一でいいと思う。
- ・拠点づくりといったときに働く場や学校をどうするという話は20～30年後に戻る人が考えるべきことだと思う。
- ・差し当たり、10年は年寄りだけ帰ればいい。幾世橋は年寄りが住むところになりたいと思っている。

委員

- ・共通認識として、避難解除準備区域だけの人口を考えないで、それ以外の区域の人で帰りたい人の数も把握する必要がある。そういった調査も必要。

委員

- ・浪江の人口は何年か後に2万人を切ることがわかっていた。原発事故がなくても人口が減っていく。

地域社会デザイン・ラボ 遠藤智栄ファシリテーター

- ・震災前からの自然減と今回の災害による減の両方を考えいかなければならないのではないかということか。

委員

- ・10年後には3千人もいればいいところではないかと思う。

地域社会デザイン・ラボ 遠藤智栄ファシリテーター

- ・今後の議論で、人口規模をどう考えるかということについても議論すべきではないかということ。

委員

- ・先生の言うことはわかるが、人口規模から働く場はどうするか等考えても堂々巡りで具体的な議論にはならないと個人的には思う。

委員

- ・人口は20年後でも30年後でもいいと思う。浪江町は、原発事故等があったけれども、子供たちがいい町だから住みたいと思えるようなまちづくりをしたい。夢のあるまちづくりを考えないと浪江町が消滅してしまうと思う。

地域社会デザイン・ラボ 遠藤智栄ファシリテーター

- ・今まで出ていない観点で、ご意見等はあるか。

委員

- ・私が仮設住宅で皆さんの話を聞いていると、とにかく自分を早く浪江町に帰してくれといわれる。そういう人たちの希望を叶える選択肢がないというのは民主的ではないと思う。
- ・平成29年3月まで帰れないというのは誰が決めたのかと思う。自分の人生をあなたが支配するのかという思いがある。

委員

- ・4年後でも5年後でもいいが、建物を建てられる建築有効面積をどれくらいとれるかを教えて欲しい。
- ・土地区画整理事業が可能かどうか検討する必要がある。

委員

- ・私の考えは、更地にして建物をしばらく建てさせないようにして、その代わり棚塩や大平山に復興住宅を建てて、津島の人なども含め浪江に戻りたい人が住めるようにするのがいいと思う。

事務局（復興推進課 金山係長）

- ・今の話は、津波被災地のことか。

委員

- ・津波被災地も中心市街地も同じ。中心市街地も除染するところは建物を解体して更地にした方がいいと思う。

委員

- ・農業も生態系の回復に時間がかかる。
- ・ヨークベニマルに仮設店舗を造って、原町行きのシャトルバスを出せばいいと思う。そうすれば住める。

委員

- ・借りられる農地を借りて花を植えたいと思っている。

委員

- ・幾世橋に浪江で死にたい人を早く帰すような町を造るべきだと思う。

委員

- ・農地の有効面積等も知りたい。耕作放棄地が出ればそれを確保することも必要。

〈B－2班〉

委員

- ・浪江小学校の近くに住んでいる母親の介護をしていて被災にあった。
- ・震災後、君津に移り、現在は二本松に住んでいる。
- ・娘が2人いるが、孫が生まれたこともあり、君津に家を持ち、20年間は君津に住みたいと考えている。
- ・家は上の原。居住制限になっている線量は高くて帰れない。

委員

- ・前の検討委員会で短期、中期、長期と分けたが短期のものは形が見えるようにしないといけない。
- ・復旧にはまず除染が最大の課題、あれもダメこれもダメで何も形になっていない。
- ・何もしないで机上で議論しても何も進まない。できることからみんなに進めて行くべき。
- ・ある程度かたちが見えてから議論しても遅くないと思う。

委員

- ・浪江だけが復旧しても生活できないのでは。小高、原町も一緒に復興しないといけない。
- ・南側は現実的に無理なので北側に生活関連施設がないと生活できない。

委員

- ・二部会制にした理由がわからない。進行管理にあんなに人数はいらないのでは。
- ・現在町民が一番に希望を持っているのは町外コミュニティであると思われるので、その話が進まないとまちづくりの議論に真剣にならない。
- ・町外コミュニティとふるさと再生は同時進行すべきだと思う。

委員

- ・浪江に町民全員で帰ることが前提になっているのではないか。
- ・帰りたい人、帰らない人がいるので町外コミュニティの話も同時にすべき。
- ・実際は帰る人も帰らない人もいる。

委員

- ・浪江の今の状況をもとに帰ることを議論しているが、大熊、双葉の中間貯蔵施設などの立地が計画されている。そうすると浪江を1日に3000台のトラックが通過すると聞く。
- ・原発が収束していない中で、原子炉、廃炉に関する周辺の動きも考慮が必要。
- ・それら外的条件把握しての判断が必要と感じている。低線量被爆のなかで暮らしていく覚悟をするためには、正確な認識が必要。
- ・男性・女性でもリスクの受け止め方が違う。家族でのリスク分散もある。

委員

- ・何から考えるか、町の規模、人口をどの程度とするのか、住民に意向を聞いた方が良いと思う。
- ・双葉郡全体で考えてもいいのでは。

委員

- ・規模について。NHK で放映していたが、宮城県名取市閑上(ゆりあげ) 地区では町で考えた規模と住民の考えが全く違っていた。住民同士まったく話し合いになっていなかった。
- ・町のありかたについては、世代、地区によっても考え方が全く違う。

委員

- ・自分の家の除染がどうなるのか知りたい、除染は進んでいるのか。
- ・平成 29 年 3 月までに除染によって線量は下がるのか、帰れるようになるのか。
- ・上下水道などが完璧でも家の修理が間に合わないのでは、自分の家の修理の順番が回ってくるのはいつになるのか不安におもう人が多い。

委員

- ・町で燃えるごみの回収を行っているが満杯になってきている。
- ・全然進まない、国が決めないので処分できない、燃やす施設がない。
- ・相馬は工業団地に焼却施設を作っている。
- ・住民が帰る前に除染しなくてはいけないが、仮置き場の了解がもらえない。

委員

- ・だれが主導して進めているのか。再生のために何が課題なのか、何か進めないといけない。
- ・ネックとなっているものはなにか。

委員

- ・専門家、行政、住民、震災後は復興について全員素人であるので、各自の持ち味を生かせるしくみが必要。いいものを作って乗り越えてほしい。
- ・次のステップのためにも町外コミュニティを必要としていることの議論が必要。商売している人はどこで営業するか重要なことだと思う。

委員

- ・上ノ原に帰る時にふれあいセンターの近くに黒い袋（フレコンバッグ）が積まれていて、帰ってくるなど言われているように感じた。

委員

- ・まちづくりについて 5 年後まで考えるとしているが、その後は考えないのか。7 年後、10 年後のことも議論する必要があると思う。
- ・除染用の仮置き場が決まらないと次に進まない。

委員

- ・屋根が壊れて雨もりしていて、除染をしても線量が下がらないような家もありそうなので、除染より一気に壊してしまったらどうか。
- ・除染の進め方が不明である。

委員

- ・町からの情報が多すぎて、読んでいないもの、理解できないものも多い。

委員

- ・除染については町から情報は出ている。
- ・広報でいろいろ情報が出ているが住民に周知できていない。
- ・区長は役場と連絡を取って仮置き場などの話は進めている。行政区によって進み方は違うと思われる。

- ・このような検討会をやるならば各行政区長に情報を行き渡らせないといけない。住民は自治会・行政区長に頼ってくる。
- ・情報が住民に行き渡っていないので具体的な事が進まない。

委員

- ・町と行政区との連携が不足しているのでは。
- ・県外に住んでいると情報が少なく不安に思っている住民が多い。

委員

- ・戻ろうという人と戻らない人を一緒にして議論しても進まない。
- ・戻る人が一人でもいれば、どう助けるか考えなくてはいけない。

委員

- ・住民同士の情報がストップしていて、戻る、戻らないの判断ができない状況。

委員

- ・二本松と浪江の線量はほぼ一緒なのに、なぜ二本松にいないといけないのか考えてしまう。

委員

- ・時間が経つと避難先に愛着が出てくる。
- ・帰る人、帰らない人の意見をどう整合していくのか。
- ・もう一度意向を聞いたらどうか、アンケートに本気で答えていないのではないのか。
- ・同じようなアンケートばかり積み重ねがない。

委員

- ・すぐにでも浪江に帰りたいが空いている家はないものか。
- ・気になっていることが議論の対象であると思う。

委員

- ・戻れないと思い、県外に家を建ててしまった人は浪江の家をどうするのか。
- ・そのような家を活用して帰町を進めてはどうか。

委員

- ・帰町にあたっての経済的自立をどうするのか、国は面倒見てくれるのか。
- ・高齢者に雇用はない、支援をどうするのか。いつまでも支援が続くものではない。

委員

- ・浪江独立国にすれば解決するのではないのか。生産、消費を町内で行い、儲けは町内で分配するようなしくみで運営。

委員

- ・福島第一の10km圏内にまちづくりをしていいのか。
- ・直すのではなく生き方まで変える町を作るしかないのでは。

委員

- ・子供達を住まわせることは考えたくない。

【Cグループ】

〈C－1班〉

なみえ絆いわき会 大波大久委員

- ・地域によっては区長から情報が落ちてこない場合がある。

- ・町内の仮置き場などの帰還へ向けた問題解決には、区長や組長などの力が必要なので、区長に全員がまちづくりの議論に入ってもらうことも検討したい。
- ・区長が入ることで、ゆくゆくは町民参加型の除染などができるのではないかと考えている。
- ・放射線量の不安解消のための勉強会の設置が必要なのではないか。
- ・先行している川内などの自治体の情勢を視察することも必要ではないか。
- ・町民参加型の除染等、町民が少しでも復興に携われる活動を行っていく。復興に携わりたい人がたくさんおり、そういう人たちを募る。

委員

- ・前の会議の時に、津波被災地の関係を今回聞けると聞いてきたが全くないのはどうしてか。
- ・大平山に墓地を移転したいという話があったが、どうなっているのかわからないので、明らかにしてほしい。
- ・町内の住宅は高齢者が多いと思われるので、高齢者に配慮したものが必要となる。町外には必要ない。
- ・また、お年寄りが住むことによって、子供や孫がお墓参りに帰ってくると思う。子供や孫にも何れ帰るという気持ちを持ってもらいたい。
- ・ソーラーや風力発電、国道6号や鉄道等のインフラの復旧についての情報等を知りたい。また、他の方々に知らせたい。
- ・請戸の漁協が復興をやり始めると漁協の方から聞いた。

委員

- ・浪江町、双葉町、大熊町、富岡町は国の管理になっている。また、仮置き場も決まっていない状況である。こんな中、帰る計画と言われても全くつながらない。
- ・除染の関係では、山林などの問題がある。除染の専門部会が必要ではないか。

委員

- ・まずはインフラの復旧。医療に関しては、今役場に毎週ではないが、先生と看護師が行っている。医者がいなければ高齢者も生活ができない。
- ・線量について、鉄道から東側は今自由に入っているが、私の住む川添の方は若干線量が高く、平成29年3月に解除になるのかは疑問。
- ・鉄道から東側だけをまちづくりしていくのは疑問であり、線量の低い地区ばかりではなく、線量の高い地区も含めてまちづくりを検討していくべき。

委員

- ・復興計画の中で重要な項目の振り返りはしていきたい。
- ・仮置き場は我々の問題でもある。地区で検討するなどの役割分担が重要ではないか。
- ・除染の問題では、いつまでにどれくらいとするというものがないのが問題である。
- ・町と国との話し合いが行われても開示されない。
- ・私の区域では23%の人しか帰らない。また、帰る人の平均年齢は65歳。この状況で地域づくりができるのか。人が帰りたくなるような計画を作らなければならないし、現状を把握しなければならない。例えばインフラの被害の状況や個人の家屋の撤去する費用、年齢別・職業別の必要な帰還人員の数。
- ・我々が絵を描く前に必要な調査の項目をリストアップし、それを調べる。絵を描けない場合は、絵を描ける人を呼ぶ。

なみえ絆いわき会 大波大久委員

- ・それぞれの部落の区長が意見をまとめてくれると安心する。行政区長さんは全員来てほしい。

〈C－2班〉

委員

- ・浪江町役場の介護福祉課の課長補佐です。4月から介護と障害者の福祉を専門としてやっている。

委員

- ・建築の専門。震災のおかげで本職の仕事を置き、悔しい思いをしながら仮設住宅の仕事をやっている。建築人生をかけて取り組みたい。

委員

- ・福島市の北警察署にある仮設住宅に約2年いる。浪江に帰りたい。老人が多く、子どもの声が聞こえない。若いまちを取り戻したい。

委員

- ・JAふたばで農業に関わっている。昨年、健康生きがいつくりアドバイザーの資格を取った。
- ・家に帰って自分の田んぼの草刈りをしてきた。荒れた田んぼを見たくない。

委員

- ・福島市の笹谷の方に住んでいる。復興計画を進めるために委員に応募した。

委員

- ・50年近く建築設計をやっている。残りの人生、浪江町の役に立つように頑張りたい。
- ・設計屋からすれば、お金があれば何でもできる。原発施設も国や東電のやる気があれば、事故が起きても大丈夫な施設は作れる。
- ・除染についても2000億円のうち6割しか予算を使っておらず、予算を先おくりせず使ってほしい。除染により低線量化を図ってほしい。
- ・建築設計の分野で力になりたい。

委員

- ・自宅が居住制限区域であるが、浪江町の整備の中心はどこになるのか。
- ・最終的な浪江の人口は？戻りたい高齢者が多いだろうから、高齢者の生活のバックアップの仕方を考えるべき。人口は減っていく一方である。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・人口のイメージが無いと計画を立てるのが難しい。

委員

- ・若者と一緒に帰ることはやめる。
- ・10年、20年後は老人ばかりの町になる。
- ・現在の若者が50歳60歳になってから帰るのでは。
- ・除染を急ぎたいが、国まかせではだめ。
- ・行政区単位で仮置き場をやっているが、搬入できる仮置き場をもう少し検討しなければならない。
- ・倒壊建物の件、補償の件を早く決めて、買いたい人が買えるようにする。
- ・インフラ整備について、下水道復旧は時間がかかる。大型仮設浄化槽を設置してほしい。自宅はオール電化なので、電気が通れば井戸の水を使える。浄化槽を設置してもらえれば、帰って生活ができる。

- ・浪江の水質を信用していない。土に放射線が浸透している。
- ・幹線道路の整備。老人が多いとしても、車が必要。JRは全線開通してほしい。
- ・なぜ放射線量が多い114号線は通行できるのか。危ないのでは。
- ・インフラ整備と除染が大事。その次に医療などの生活基盤を整備する。

委員

- ・浄化槽設置はいいアイデア。町の規模に合わせた浄化槽を設置すればいい。賛成。

委員

- ・上下水道・電気などライフライン整備は大前提。
- ・国・県が浪江町・双葉郡をどうグランドデザインしているのか、我々に見せてほしい。

委員

- ・どんな町にするのかもっと話し合おう。商店がないから、住民がいらないからではなく、住民が帰ってから商業などが戻る。
- ・除染をするには、更地にするのが一番早い。コンクリート、アスファルトを取り除き、新しくするのが最も早い。アメリカのロングラップ島では、土を10cm剥いで、除染をしている。島民は帰るかどうかまだ迷っている。長崎・広島は更地だったから早く直った。
- ・農地の草刈り。できないのではなく、できるようにすることを考える。
- ・日本学術会議で震災復興の提言を出したが、どんな内容か。

委員

- ・浪江の復興拠点場所を決めてほしい。
- ・消防署、警察署が常駐していれば、町民が帰れる。
- ・ボランティア活動の拠点をつくりたい。
- ・インフラの整備。電気はあるが、飲める水を早く通してほしい。
- ・浪江町内に、仮設の宿泊施設、いこいの村がほしい。ボランティアの人たちが宿泊できる施設がほしい。

委員

- ・消防署にはすでに常駐しており、警察署はまだである。ボランティアの人たちは、浪江の近くに宿舎がないので、寝泊りができなく活動ができない。
- ・貴布祢は低線量地区であり、お風呂、厨房がある。復興の拠点としてはどうだろうか。

委員

- ・外部から見ると、山間部は高線量地区であり、老人が多い等マイナス面ばかりを話題にしている。それをプラスに捉えられないか。
- ・山間部は山林を伐採し、バイオマス発電という案もある。浪江にそういう発電所を作ってみてもいいのでは？それを町の収益にする。南相馬では実験を実施し、うまく行っている。
- ・高齢化については、医療や介護の需要を見込んで、介護施設などの産業を作ったらどうだろうか。不安材料を産業に変える。
- ・浜街道の嵩上げを土ではなく、建築で行う。
- ・請戸は特に被害が大きいので、世界に周知できるような公園用地としてはどうか。ソーラーを設置する案は、海のそばなので塩害が心配。ソーラーよりは風力発電はどうか。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・意見は大きく2つ、計画策定上の課題（前提条件）とまちづくりの内容に分かれた。

委員

- ・小高は住む状況になっている。子供たちも帰れる。30代の人たちが戻りたくないのに、戻れというのは無理。30年後、60歳になって子育てが終わったときに、戻れる町になっていれば良いのではないか。

委員

- ・高齢者には帰ってもらい、若い人たちや元気な老人は通い、高齢者を介護する。

委員

- ・津島は帰宅困難であるが、それ以外の制限地区は戻れるのではないか。保育園等を作って若い人が戻れるようにしたい。

委員

- ・1学年でも良いので学校整備をしてほしい。

委員

- ・自分の家以外には戻らない、仮設は嫌だという意見がある中、どういう条件で町に戻るか。

委員

- ・年寄りがまず帰ることにより復興が始まり、若い人が戻れるようにする。

委員

- ・高齢者施設の中に、幼稚園があれば良い。

〈C班：全体発表の準備〉

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

どういう議論がそれぞれのグループであったかを皆で確認

(C－1班)

- ・皆さんの意見をおさらいすると、まず、除染の問題、仮置き場をどうするのか。
- ・皆さんですでに作成した復興計画の振り返りをする。
- ・会議の進め方として現状把握をきちんとすべきではないか。どれくらいの人たちが帰ろうとしているのか。インフラの被害状況はどうか。こういった前提となるデータがないと町を描くことはできない。
- ・お年寄りもそうであるが、若い人が段階的に帰って来れるようにする。そして、町外ではなく、町内に住宅をどう整備するか。町内に帰ってくる雰囲気を作ることが大事。またインフラ整備として学校や医療施設、復旧の見込みに関する議論。
- ・全体にまたがる議論として、例えば川内とか、他の自治体でどういう議論が進んでいるのか。視察に行ってもいいのではないか。線量に対する不安が多いので、学習会を開いて、きちんとした情報を得る。そのほかに区長さん全員の参加、議員さんの参加もある。

(C－2班)

- ・まずは、どういう町を目指すのか。
- ・除染に関する問題。町民がやれることがあるのではないか。
- ・インフラの復旧については、6号やJRの復旧、ライフラインの調査結果がどうなったのか。
- ・国と県に対することとして、ランドデザインや日本学術会議の提言はどうなっているのか。
- ・その他、産業の創出、消防署・警察署の常駐。
- ・最後に、町の中心をどこにするのか。

- ・このようなことが意見として出てきており、皆で合意しながら、特に重要な所に赤で丸をつける。どんな町を目指すのか。

委員

- ・絵を描く前に今の実態を調査する。私の区域では 23%しか帰らない。この状況では絵が描けないから、まずは現状を把握する。年齢別、職業別の帰還人員。どういう人が帰るのか。

委員

- ・客観的な視点から見ることは大事。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・津波被災地の議論が出ているが、どうだろうか。

委員

- ・早期に町内に移転の拠点を設ける。災害公営住宅ではなく、本当の自分の家をつくる。

委員

- ・計画の振り返りについてであるが、実際に実行している部隊が今の推進体制ではまずいとか、行政区長を入れなければいけないとか、そのような課題が出てきているはず。そういうものを出してほしい。そうすればもっと具体的にどう進めるべきか見えてくる。

委員

- ・復興塾と浪江の行政が何故一体になってやらないのか。

J Aふたば 神長倉正満委員

- ・復興塾はどちらかというと商店街づくりが主になっている。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・どちらが正しいということではなく、みんなで情報を共有するべき。

委員

- ・除染が進まなければ、浪江の復興は進まない。除染をするということは、仮置き場が問題となる。仮置き場は各行政区で決めなければならない。よって、各区長や議員にも入ってもらいたい。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・区長の役割が大事だということは共通している。ここで出た意見は区長会の中で確認する。そのような場を作らなければならないと思う。

○グループ発表

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・グループごとにどのような議論があったのは、成果を出し合いたいと思う。
- ・ホワイトボードに貼ってあるものは、全部記録として残るので、皆さんにはまた議事録としてお渡ししたい。
- ・発表時間が限られているので、ポイントを絞ってご報告頂きたい。

【Aグループ】

委員

- ・気になっていることとして、やはり外せない問題になるが、放射能関連の問題が出た。これは皆さんも気になっていたが、今回のまちづくりを議論するにあたっては、除染が進まないとか、そういった議論はせず、どのような町を残していかなければならないのかという議論に徹しようということで、意見が出た。

- ・賠償関係、原発事故収束等の意見も出たが、気になっていることとして、市街地が虫食い状態になってしまうこと、町に戻る人、戻らない人の違いは何か等の意見があった。その他、中間貯蔵施設の完成時期についても気になる点としてあった。
- ・議論する必要があることとして、町外コミュニティについては、一時的なものであり、フルスペックにする必要はないのではという意見が出た。フルスペックにしてしまうと、家に帰るとか、人が自立できなくなってしまうのではという意見が出た。
- ・今後まちづくりをしていく上で、やはり企業を誘致する必要があり、働く場所がないと戻ってくる人もいないと考え、企業にとってのメリットとして、法人税を半分にするといった税制優遇が必要だという話が出た。これについては、今後、議論を進めていく必要があるのではないかと意見が出た。
- ・具体的な提案としては、企業誘致をするにあたり、廃炉関係の事業や除染作業員の人に浪江町に住んでもらい、そこから福島第一原子力発電所に行ってもらえるような施設をつくるという意見が出た。
- ・人が集まれば、飲食業、電気屋等、まちに集まってくるのではないかとということで、コンパクトシティをつくるという意見が出た。
- ・区画整理等で権現堂地区を更地にし、新たなまちづくりを行うという提案も出た。
- ・最終的には、浪江町に家族と一緒に住まえるようなまちにしていけないといけない、誰もが住みたくするような魅力的なまちづくりを皆さんと一緒に考えていく必要があるのではないかとということで提案させて頂きたい。

【Bグループ】

〈B－2班〉

委員

- ・気になっていることとして、浪江町だけで考えていいのかということで、近隣との連携として、小高や南相馬とまちづくりを考えたらどうかという意見が出た。
- ・やはり浪江一町村だけでは、到底克服するものではないということ、町と他の行政との連携、いろいろな意味で他の地区との利害関係等も挙げられた。
- ・帰るためには、黒いものが至る所にあったのでは、帰る意欲を削がれてしまうという女性の意見や除染の進め方が不明であり、本当にそれで良いのかという意見も出た。
- ・廣坂さんの発表にあったように、同時並行的に町外コミュニティを考える必要があるという議論もあった。
- ・帰る場合の町の規模をどのくらいにするのか、5年先、7年後、10年後をどう考えるべきか。
- ・今、大熊町と双葉町で、廃棄物を中間貯蔵できる計画になっているが、廃棄物を運ぶのに1日3,000台と言われるトラックが町の中を走ったら、どのような町になるのかという意見も出た。
- ・原発から10km圏内のまちづくりはどんなのだろう、未知の世界なのでやはり議論する必要があるという意見があった。
- ・具体的な提案としては、帰ると決めた場合の経済的自立をどのように考えるべきか。浪江を独立国にして、分配の仕組みを変えろという意見等、帰る人、戻らない人がいる中で、具体的に帰る場合にどう考えるべきかという意見が出た。

〈B－1班〉

委員

- ・気になった点として、瓦礫の処理や除染等、線量の問題からしても、一番危険があるということや特に河川の線量が高いという意見があった。
- ・また、震災前から人口が減少していることも踏まえた上で考えていく必要があるということ、その他、生態系、下水道の問題、インフラの問題等の問題も出た。
- ・避難指示解除準備区域だけでなく、もう少し広範囲の部分も考えていく必要があるという意見も出た。
- ・論議する必要があることとして、帰る人や帰らない人、また誰が帰れるのかということ等、3地域の帰還の意思の確認の問題。市街地、中心地、農地、それぞれをどのようにして使うのかという土地の問題をどうするのか。土地区画整理事業が可能なのではないかという意見も出た。
- ・ベースとなる時間軸の問題として、時間軸に縛られない発想も必要という意見や逆に時間軸と計画を整合させるという、相反する意見も出たが、20年後、30年後の形も想定した幅広いまちづくりの構想が必要だという意見が出た。
- ・20年後、30年後の議論をしても仕方がないという意見も出たが、30年後の議論は若い人に任せた方が良いのではないかという意見も出た。
- ・浄化槽が使えるようになったので、それなりの対策が講じられるという意見も出た。
- ・具体的な提案として、農地に花を植えたいという意見や野菜を植える準備をしている、新聞に出たが、卵が出荷できるようになったという先の明るい話題も出た。
- ・誰が住むのかということについては、明日にでも帰りたいという高齢者の声を活かし、高齢者を受け入れられるような施設を作りたいという意見が出た。

【Cグループ】

委員

- ・1番目として、前に作った復興計画について振り返ってみてはどうかという意見、そしてそこにあるものを継承しながら、具体的にものを進めていってはどうかという意見があった。
- ・2番目として、この今の浪江町の現状をきちんと把握して、それによって復興の計画を進めて行くべきではないか。それをなくして、復興計画も何も具体的に進んでいかないのではないかと、という意見が出た。
- ・3番目、除染の問題として、今は仮の仮置き場になっており、本当の仮置き場がしっかり決まっているところが少ない、仮置き場の選定ができないという状況にある。
- ・4番目の津波被災地の問題として、土地の移転を早急にしてほしい、墓地を大平山に移転してほしいという要望があった。
- ・その他、請戸漁港の復興や6号線、鉄道路線の計画を知りたいという意見があった。
- ・5番目として、町をどのような町にしていくのか、これから町の人口はどのぐらいいるのか、高齢者をどうするのかという意見が出た。やはり、一番帰りたいのが高齢者であり、今すぐにでも、明日にでも帰りたい、最後は仮設住宅ではなく、自分の家で…というのが高齢者の切実な願いであり、それをどうするかという意見が出た。
- ・浪江町の中心をどこに置いて整備するのか、復興の拠点の場所をしっかり決めてほしいという意見やボランティアが活動出来るように、復興拠点をしっかり作って進めていけば、早く

復興するのではないかというような意見があった。

- ・最後に、区長さんや議員の方にもこの復興策定委員会に入って頂き、検討を進めていくという意見が出た。

○グループ発表まとめ

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・C グループに参加させて頂いたので、補足すると、草刈りや除染作業等、具体的に行動していきたいという意見が多かった。
- ・いろいろな規制があると思うが、そのような意見があったということは皆さんにお伝えしておきたい。
- ・また、若いグループとCグループとの大きな違いとして、除染の話は横に置いて、具体的にまちづくりをどう進めるかということをまず議論するべきではないかという意見があったということ。
- ・高齢者がまずは住めるようなまちの整備を急ぐべきではないか、という議論のある一方で、20年後、30年後を想定したまちのあり方を選ぶべきではないかというような意見もあった。
- ・要するに、どのようなまちを目指すのかを巡っては、いくつかの論点が出てきたかと感じており、これについては、次回以降、整理をしていく必要があると思う。
- ・グループごとに違う意見、思いが違うものがあったということ、同じようなテーマについても複数の見解があったということについては、整理をしておきたいと思う。

○質疑応答②-1

委員

- ・昨年度は町外コミュニティ部会に所属していたが、今回の部会では、まちづくりに係る議論ということで、議論を絞ったということであるが、昨年度数カ月間かけて議論してきたものを今回議論しないと言われても、その理由が理解できない。
- ・町民に発表する時には、議論を絞った理由を説得性のある内容で説明してほしい。
- ・町民は皆悩んでおり、町内、町外がどのような姿になるのか、しっかりそれを描いた上で町民に説明する必要があると思う。
- ・町外コミュニティについては、将来的な姿を描いた上で、かつ、いろいろな制約がある中で継続して検討をしていかなければならないと思っているが、今後誰がどのような形で皆の意見を聞き、進めていくのか、疑問に感じている。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・後でまとめて、答えられる範囲で事務局にお答え頂きたい。

委員

- ・先程若い人たちのグループが、除染についてはとりあえず脇に置いてという話が出ていたが、年間1msv以下等、帰るための具体的な数値はイメージしているのか。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・グループの中で、どのような議論があったか聞かせて頂ければと思う。

委員

- ・放射線量に関しても、今日本の基準とIAEAの基準が全く違うものであり、それを皆で理解し合おうという話にはなったが、具体的な数値の話はしていない。

委員

- ・ということは、IAEA の基準であれば受け入れるということなのか。

委員

- ・そういうことではなく、放射線量の基準については気になっていること、ということで意見が出た。

委員

- ・除染の話があったときに、線量については、いろいろな人がいろいろなことを言っており、それをこの場面に持ち込んで話をしてしまうと、そこから先にもう一歩も進めなくなってしまう。よって、とりあえず、今は議論をするのはやめましょう、ということで除外した。
- ・除染の問題については、この場で話をしても何も結論が出てこないの、その先のまちづくりをどう考えるか、自分達がどのような町をつくりたいか、ということに焦点を絞ることにしようということで議論を進めた。

委員

- ・町の資料に、低線量と書いてある。この線でまちづくりの議論を進めて良いということなのか。

委員

- ・まちづくりを考えていくときに、まず今使える土地というのはどこだろうかということを考えると、第一に帰還困難区域は除かざるを得ない。その次に、居住制限が掛かっているエリアがあり、この土地を利用しようとする場合、ある程度、線量を下げなくてはいけないという課題がある。
- ・よって、常磐線から東側のエリアについては、ある程度の対策を講じれば、十分住めるところが作れるのではないかという考えがベースとなっており、そこから議論をスタートした。
- ・例えばということで、国道 6 号線を中心軸にして、東西各 1 km の範囲で南北に浪江町をつなげていき、そのエリアを核にするようなまちづくりを考えるべきではないのかという意見も出ている。

委員

- ・放射線量については、私は全く知識が無いし、何が正しいのかということもわからない。
- ・本来は私達が考える問題ではなく、専門家が考えるべきであり、ここで議論しても仕方がない問題だと思う。
- ・このような問題は専門家、国等に考えてもらい、私達は何が安全なのか等、正しい回答を専門家に要求していく等、被災者として行動を起こすべきであり、それが浪江町のアピールにもつながると考えている。

○有識者助言

住まいの研究所 鎌田一夫有識者

- ・今日のグループ討議については、まちづくりの技術者である私の立場においては、助言をする段階ではないので、感想だけを話す。
- ・昨年度から同じような議論をしているという意見もあったが、昨年までとは少し違う印象を受けている。
- ・町民の皆さんの意識が、これから町を何とかしていかないといけないという方向に進んでいると感じられ、進んだ議論がされているように思った。

- ・次回はもう少し具体的にまちづくりをどうするかということの議論になると思うので、それを非常に楽しみにしており、次回はもう少し助言ができればと思っている。
- ・また、長期的なビジョンを持っている方もおり、それは当然必要であり、長期的な議論をしないといけないと思うが、一方で、平成 29 年という 3 年後は大きな節目の年になり、実質的なまちづくりのスタートとなる。
- ・そのスタートラインをどう迎えるかが重要であり、これから平成 29 年までに何をしていくのか、短期的な議論も必要である。
- ・長期的な展望を持つことに加え、平成 29 年にどのようなまちの姿でスタートするのか、是非、次回は議論して頂きたいと思っている。

○質疑応答②-2

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・質疑応答で出た意見について、事務局の方から回答して頂きたい。

事務局（復興推進課 宮口課長）

- ・町外コミュニティについても、復興計画において当然決めていかなければならない事項であり、まちづくりの計画だけを進めて、町外コミュニティをやらないということではない。
- ・町外コミュニティについては相手があることで、なかなか浪江町としての要望が通らないというのが現状である。
- ・今、早急にやらなければならないこととして、仮設住宅の解消があり、公営住宅の建設場所を協議して決めていかなければならない。しかし、相手方から場所がないとか、少数で分散してほしい等の話も出てきており、皆さんの意向をどこまで反映できるのか、正直難しく、要求が通らない中で、交渉を進めている状況である。
- ・介護施設についても、浪江町の要求だけではできない状況であるが、他の自治体の設置状況等を確認しながら、協議を進めている。
- ・その他、介護職員が不足している等の課題も出てきているが、町外コミュニティについても協議を進めているので、ご理解頂きたい。

委員

- ・今の回答については、個人的にはわかっていたことである。
- ・この問題は町だけで解決できるものではなく、県や国に動いてもらわないと解決出来ないと思っている。よって、課題を明確にし、町がやるべきこと、国がやるべきこと等、整理すべきだと思う。
- ・また、町外コミュニティについては議論できないという状況であることを町民に対して、国に対してアピールしていくべき。
- ・町民にどうやってわかりやすく伝えられるか、我々も勉強していかないとならないと思うし、町としても具体的に説明できるようにしてもらいたい。

委員

- ・県と協議してもらっているのはわかっているが、土地を提供できるという地区があるのに、なぜ、その地区を優先的に申請できないのか？
- ・桑折町 4 丁目から 5 丁目の土地等、浪江町の要請があれば対応できると県から言われている土地もある。
- ・手を差し伸べてくれている町があり、それらをもっと大事にすべきではないか。

事務局（復興推進課 宮口課長）

- ・町外コミュニティの設置に関しては、南相馬市、いわき市、二本松市という3箇所で開催している。
- ・仮設住宅については、ご指摘があったように、桑折町、福島市、本宮市等に設置している。
- ・町としてはそのような地区にも公営住宅を設置し、生活再建ができるようにしていきたいと考えているが、過去のアンケート結果を見ると、公営住宅入居希望者はあまり多くない。
- ・町の情報不足もあるかもしれないが、今回の意向調査で、町民の意向を明確に把握したいと考えている。
- ・その他報告事項として、二本松市については、公営住宅の建設場所が1箇所、安達で決定した。総数70戸を想定している。
- ・南相馬市については、8箇所提示を受け、2箇所まで絞り込みを行った。40戸程度を想定しており、場所については公表できないが、浪江町に近く、面積の広いところで交渉を進めていきたい。
- ・いわき市については、浪江、双葉、大熊、富岡の4町による協議を進めている状況である。

高崎経済大学 櫻井常矢ファシリテーター

- ・今日出された意見を基に、この後の議論、段取りを組んでいく予定であるが、私の入ったCグループについては、この部会で私達が今後どのような作業をやっていくのかということについて、了解した、わかったというお話を頂いた。
- ・よって、まずは皆さんで足並みを揃えるということについては了解頂けたと思っている。
- ・除染についての議論については、除染を問題にしないという訳ではなく、別の枠組みの議論として捉え、今回は整備計画の具体的な中身について議論していこうということで全体での了解を得たと思っている。
- ・この2点については、今日のまとめとして確認させて頂きたい。
- ・その上で、今日出たいくつかの論点をこれから整理し、どのような話し合いの順番があるのか、どのような議論の項目があるのかということについて、早急に整理をし、皆さんに郵送したいと思う。
- ・そして、皆さんにご確認頂き、この段取りで良いとか、別の進め方が良いのではないかなという意見を文章等を出して頂き、その内容に沿って次回の進め方を決めていきたいと考えている。
- ・今回は世代別でグループ分けをしたが、例えば男女別とか、どのようなグループ分けが良いか、部会長等と調整をしながら決めていきたい。
- ・今日は長丁場であったが、皆さんの今日の目標とした部分については、ある程度到達できたのではないかなと思っている。
- ・次回以降は大変になると思うが、是非ご協力をお願いしたい。

以 上